■証言：戦後社会党・総評史

日本社会党における佐々木更三派の歴史：

その役割と日中補完外交――曽我祐次氏に聞く（下）

青年同志会について

――最初に私から１，２点お伺いします。社会党に入る前に青年同志会で活動されていたという話ですが，これについてはどういう組織で，なぜそれに加わることになったのでしょうか。その後，47年11月に社会党に入党されるわけですが，当時，青年がそういう政治活動にかかわる場合，社会党だけではなく共産党もあったと思いますが，なぜ共産党でなく社会党に行かれたのか。

曽我　この青年同志会というのはあまり大げさなものではなく，私が居住していた品川区の西品川地域ですが，そこの青年の有志を集めていました。戦後，地域青年団活動が活発でして，特別な意味はございません。それを政党化しようということはなかったです。地域的なもので，上部団体はありません。

――地域の青年団のようなものですか。

曽我　ええ，そうですね。ただ，私が「始原林」という貸本屋をやりまして……。だから，これとの関係があるんです。「始原林」を中心に近隣の青年が集まって，「青年同志会」という名前をつけてやったと。だから，特定の政治イデオロギーはここにはございません。

――当時，住んでいるところには正式な青年団はあったんですか。

曽我　なかったです。私がつくったようなものです。

――それがやがて普通の青年団になったんですか，あるいは立ち消えたんですか。

曽我　立ち消えですね。もう１つは戦後，小学校の同窓会の再建を最初にやり，それとかなり重なっているんです。

――じゃ，この青年同志会に入った人たちは小学校時代からの友達ですか。

曽我　ええ，そうです。三木小学校の同窓会を基盤にして出来上がったものです。

――共産党ではなく社会党だったというのは？　そういうことは意識していなかった？

曽我　もともと意識はありますよ。意識はあったんだが，戦前，多少国家社会主義に関与していたということが，逆に共産党員にならなかった１つの大きな理由でしょうね。つまり，右翼は左翼の裏返しでもありますからね。そうすると社会党は幅が広くてつかみどころがないようだが，社会党に入ることが一番いいのかなと自分で判断したわけです。人から勧められたとか何とかということはないです。自分で入党書を取りに行った。

――取りに行ったということは事務所みたい

本稿は，「社会党・総評史研究会」第６・７回の研究会の記録の続きである。曽我祐次氏の報告については，前号を参照されたい。

なものがあったんですか。

曽我　事務所はない。大蔵職組の役員をやった高橋君という人がいて，その人が社会党員であることを知っていましたから，そこへ……。

――知り合いの社会党員のところへ申込書をくれということで行って，もらって帰ったわけですね。

曽我　そうです。だから，その高橋君という人が私の入党の紹介人になるわけです。

――国家社会主義の考えがもとにあったということですが，尊攘同志会に誘われて，そのとき昭和維新の話とか国家社会主義的な傾向の話を聞いたとうかがったのですが，どういう話を聞いたんですか。

曽我　川崎大師にある日本製鉄富士製鋼所というかなり大きな会社の青年学校補助教員みたいな格好で入っていて，そこに青年学校の生徒が約250人いたんです。これが関東から東北地域の青年で，船の鉄板と鉄板を組み合わせて船形にする「帯鉄」をつくっていたんです。そこの先生がみんな召集で軍隊に持っていかれて，校長先生と私しかいない（笑）。そこには宿舎があって青年学校の生徒を管理していたわけです。

青年学校も授業があるのでやりましたが，ぼくが人前でしゃべることを覚えたのはそこへ行ったからでしょう。「八紘一宇」とか何とか黒板に書いて一生懸命やっていました。教練のある日は特に腹が減るから，食堂に飯を余計に出せというような交渉するわけです。そうするとだいぶ食事を出してくれたりして，私は評判がよかった。そこへ一緒に泊まったんです。何しろ年寄りの校長先生と私しかいないのだから。

尊攘同志会のほうは横山貞夫という私の友人がそこへ出入りしていたわけです。青年学校には三八式歩兵銃が50丁位ある。それを何かのときに役立てようと思ったのかもしれない。そこで私をその寄り合いに無理に引っ張っていった。３回か４回か行きました。

書記局について

――その後のところの書記局民主化運動をもう少し説明していただきたいことと，当時，古くからの人と新しく入ってきた方とその真ん中に曽我さんがおられたという話ですが，全体として何人ぐらいいたんですか。

曽我　左派社会党は，最初は12～13人でしたか。終わるときは35～36人いたかな。選挙をやるたびに勝ち，試験はやっていませんでしたから，そのたびに大学教授の推薦，あるいは左派の代議士の紹介，推薦で入る縁故入局でした。

――その中で「くれない会」は25人ですか。

曽我　最終的にそうなりました。大勢力でした。

――書記局の中では多数派ということですね。

曽我　数の上ではね。実力の上ではわかりませんよ（笑）。相当，ボスがいましたからね。

――民主化運動はその人たちで……。

曽我　私が付けた名前ですね。つまり，偉い人が国会議員の部屋へ行っては，あいつはどうの，こいつはどうのと品定めをやるんです。全部がそうではないけど，この中に特にそういうことが好きな人がいたんです。それはひどすぎるし，かわいそうだから……。

――そういうボス的なのを追い出したわけですね。

曽我　私より後から入ってきた人を集めて。ちょうど西久保桜川町に左派の本部があったんです。愛宕の山が近くて，あそこで尊攘同志会の一部の人が腹を切って死んでいるんです。私は３日間の兵隊だけど九十九里へ行ったものだから，ある意味ではよかったのかもしれないが，

そうでないと……。

――民主化というのは，告げ口したりして回っている古い書記連中を追い出して，若い人たちを……。

曽我　いや，追い出してということではない。そういう者にいじめられないように団結，頑張ろう，ということです。ちょうどそのときに，書記長が野溝さんから和田さんに代わったんです。なぜ野溝から和田に代えたかというと，当時の書記局の中の話では，「ドイツ社民党党首」と言ったら名前を忘れちゃって後が出ない。ドイツ社民党党首シューマッハーの名前が出てこないから，「アーベーツェー博士」だって演説でやったんです。それが左派社会党の中で話題になって，16人のときの書記長は野溝でいいけど，これだけ大きくなったんだから代えたほうがいいんじゃないか（笑）ということになってきて，それで結果として代わるんです。別にしこりをうんと残したわけではなくて，和田さんに代わるんです。

和田さんに代わった書記局会議のときに，私が立って「中古論」をやったわけです。あなたも代わって書記長になった。中古だ。おれも中古だ。だから，この書記局も中古を間に入れて，古い人も新しい人も仲良くやってくれと。

書記局会議でそういう演説をやったんです。それからちょっといじめが少なくなった。それまではかわいそうだったよ。高沢とかは年中やられていた（笑）。……特に只松祐治というのは独特の感覚があった。本部の裏に警察の寮があるんだけど，そこに通報しているやつがいるって言うの（笑）。久保田忠夫がそれにやられちゃったの。久保田がそうだって。全くそういう考えられないような話が……？

――スパイ容疑ですか。

曽我　だから「くれない会」っていうのはそんな大げさなことでできたのではなく，後から左派社会党本部に入ってきた比較的頭が優れている大学出。あとは軍靴をはいて新橋の焼けビルに入った古い諸君。それが先輩顔をして，後から来る大学出をいじめるわけだよ。ぼくはその間に立って，何だ，おまえは最初から新橋で飯を食っているけど，おれは飯を食わずに下で黙々とやっているのに何だって（笑）。だから中古になってやったから，それが結果的に「くれない会」になっちゃった。

それで55年の統一のときに初めて，鈴木・佐々木派と行動を共にしようと決めたわけです。以後，「くれない会」と言って書記局では一番大きな勢力。平仮名で書く人もいるし，「紅」もある。特段，正確に定めたわけではない。正式には「社会主義研究所」です。それで雑誌を出しました，ちゃんと。

――ということは，派閥としても機関誌を出していたわけですか。

曽我　いえ，社会主義研究所として。だから，鈴木・佐々木派の社会主義研究会とは相対的な自立性を持っていた。

――研究所には独自のスタッフがいたんですか。

曽我　スタッフって，みんな一緒に働いているのがそうだから。それと運営のために特別にっていうのはいません。事務所はないが，会長とか事務担当はいましたよ。

派閥，代議員権について

――鈴木・佐々木派という社会党の派閥にかかわることですが，派閥は事務所を持っていたり派閥としての会合を開いたりスタッフがいたりということはないんですか。

曽我　金がないから独自に事務所を持った派閥は，まずないです。

――派閥としての，例えば意思統一とか相談は随時どこかで集まってやるわけですか。

曽我　国会の中で部屋はいつも借りられたので，そこで集まってやるということです。ちょこちょこっとしたやつは，議員会館で会の事務局長の部屋へ集まれというのでそこへ集まってやる。だから特別派閥の事務所を明確に持ったのは，少なくとも私が本部にいた限りにおいてはなかったと思う。

――国会の中の適当な部屋を使って，随時集まって相談すると。

曽我　だいたい，事務局というのはその派閥の事務局長的なところにおいた。あとは議員会館の部屋（委員会室）を借りる。しかし，夏などは涼しいところの旅館などで，学習もかねて……。

――事務局をやっている佐々木さんの部屋がそうだということですか。

曽我　そうです。ほかはどうですか。佐々木さんのところへ行ってしまいましたが。

――江田さんのほうで国会議員の代議員権の自動的なものをやめて，そして77年に今度は国会議員の代議員権を戻す。そのときに最初は大会決議で出して，次の６回大会で規約改正をするわけです。その辺のやり方は曽我さんが進めていったということですか。

曽我　当時そういう問題をやるのは本部の総務局ですから，総務局が牽引してそういう手続きなどはやったと思います。

――特にそういう議論をしたということは記憶にないですか。

曽我　そうですね。江田さん組織局長のときに党機構改革方針が出たわけですが，これは国会議員の自動代議員を制限して，それでずっとやってきたわけです。そして今度は協会規制があって……。

――1977年ですね。

曽我　それが終わった後，また元へ戻す。

――それは，大会代議員に協会派がどっと入ってきてということがあったわけですね。

曽我　それがあり，議員団のほうでそれはおかしいのではないか。党の公認で国会議員になって，それだけ国民から信任を得ているのだから，それは自動代議員でいいのではないか。昔に戻せという，議員団側からの要望があったわけです。

――そのとき国会議員を３分の１にするという規定が入ってきますが，これも書記局のほうで案をつくったという格好で，曽我さんとしては……。

曽我　国会議員の代議員数は，全体の代議員数の３分の１を超えてはならない，という規定です。それでよかったと思いますが……。

佐々木派・書記局との関係

――社会党の事務機構というか，官僚制というか書記局ですが，数は最初は数名ぐらいで，その後，十何名，そして30～40人ぐらいになって，その後はどうだったんですか。

曽我　参考までに，ここに結党以来の本部職員の名簿があります。取り扱いを注意してもらいたい。あまりまいてもらっても困るから（笑）。

――本部の書記局員は70年代には何人ぐらいだったんですか。

曽我　機関紙を含めたら200人ぐらい。その後，だんだん減っていく。国会議員が減っちゃえば。だいたい国会議員の歳費が党財政の中心なんだから，当時。

――なるほど，そうですか。

曽我　でも，そんなに増減しなかったですよね。90年代半ばまでは国会議員がどんどん減っていくということはなかったですから，だいたいは維持していました。

――いつごろから減り始めるんですか。書記局の数がどんどん減っていくというのは。

曽我　書記局がどんどん減っていく傾向は，

私が本部にいた86年まではないと思います。

――反戦騒ぎのときに「配置転換」と称して切りましたよね。

曽我　私は反戦騒ぎの時は浪人で，その後に復帰していますから。1969年に社会党が敗北するわけです。それが理由になって，都合確か69人だったか，２～３ヶ月のうちに一斉に辞めたんです。そういうことがあって，その後，国会議員数も復活してくるわけです。

――70年代はまた少し増えましたので。

曽我　その復活するとき，採用が社会主義協会系統の人がずらっと入った。特に機関紙に入ってきた。

――その数はその後，減っていなくて，ずっと同じ数です。

曽我　機関紙はそうだと思いますが，政審などは異動しています。

――協会を排除するときには，そこを減らしていったんですか。

曽我　いや，それは関係ないです。書記局を協会だから切るということは別になかったです。

――例えばドイツの社民党やイギリスの労働党の書記局はどのくらいの人間がいたんでしょうか。そのことは社会党では話題になったことはないですか。

曽我　それはあります。私はドイツ社民党へは２回行っていますから。やはり300～400はいます。ちょっと規模が違いますな，うちよりは。行ったのは政権を取ってからですから。

――なるほど。自民党の事務局はどのくらいですか。その辺はご存じですか。

曽我　議員個人が秘書をたくさん持っていたから，10人，20人。党機関の代替をし，議員秘書が書記局の代替をするというのが自民党じゃないですか。

――社会党の場合も秘書がいますでしょう。秘書と本部書記局との関係は別にないんですか。あれば，どういう関係ですか。

曽我　本部で秘書を統合する，組織する役割があります。権限は組織局が持っている。そして，秘書団には秘書団団長，事務局を置いて，それとしょっちゅう連絡を取っているし，何か大きなことがあった場合は秘書を集め，書記局が足りないところを秘書に補ってもらっています。自民党に比べて，議員の数から言えばうちも書記局員は多かったんじゃないかと思います。自民党は，うちほどたくさんはいないと思う。議員の率からいって。

――「議員政党」か「組織政党」か，という言葉が飛び交っていましたが，その実態は，議員が特権的に物事を決めるのではなく，書記局のほうで下部機構に「信任」という言葉を含めて議員をコントロールする，しないという話だったのですか。

曽我　そういうつもりは，もちろんあります。

――それはやはり江田さんということですよね。

曽我　江田さんはそういう方向で，それでしばらく続いてきました。

――そのとき各派閥で労働組合はどのように関係するわけですか。

曽我　労働組合は書記局とは直接関係ございません。お金の出し方は，１つは「支持団体」と言って，日本社会党を支持しますということを機関で決め，それで一定の支持費を出す。その代わり，大会のときには大会代議員をその支持団体から出しました。そういう関係にはなっていますが，書記局で２つ重なるということはなかったです。総評の書記で社会党の書記でもあるというのはないです。交流はあまりなかったけど，若干はありました。

――例えば鈴木・佐々木派が主流派を占めて

いて，そのときに総評がこんなことをやってくれと社会党に申し込んでくるということはあったんですか。

船橋成幸　そういう要請はずいぶんありました。70年に組織局長になる前は労働局にいて，71年に私が組織局長になります。労働局にいた65年に「指令第４号」（中執決定）を起草したんです。それは党と労働組合の関係を正常にしようということでやりました。

１つは職場に党をつくろうということ。それから労対会議をつくって，組合の幹部を集め，まだ覚えていますが，例えば槙枝さんとか山岸さんとか，ああいう人たちが出て来ましたから，定期的な労対会議で党の機関と労組幹部の党員との交流会をやり，党も労組もそれぞれの役割を認め尊重してつきあっていました。

これがその後，私は辞めて横浜市役所へ行っている間に圧力団体化したというか何というか，関係が大きく変わったように思います。

――ということは，労働組合が非常に力を持ってきて，どんどん発言力が高くなったという意味ですか。

曽我　発言権を持ったということではなく，特に社会党へ来るのは活動レベルの大衆運動を含めたこともちろんありますが，主として法案，制度・政策にかかわることです。今で言う政策要求で，例えばこういう法案には反対してほしい。こういう法案は，中身はこういう具合にしてほしい。その場合，労働組合の側からすると，労働省の各種の審議会がありますが，これは労使，学者を入れた３者構成になっていて１つの結論が出るわけです。

しかし，出てもなお最後に国会の方ではこういうことをやってほしい。それは法案改正まで行くこともあるでしょうし，例えば質疑を通じて疑問点を正してほしいということもあるでしょう。そういうことは日常的に党と労働組合の間で意見を交換していました。

――つまり，社会党が組合の党員を集めて対策，あるいは方針を図ろうとしたのに，途中から組合の側の社会党の国会対策についていろいろ要望を出したり圧力を掛けたりするような形に転換してきたということですか。

曽我　それはずっとあったと思いますが，そちらのほうが……。

――でも，最初につくったのは要望を聞く場ということだったのですか。

船橋　というか，党の方針を説明して，組合からの意見も聞くという中央労対会議というものをほんの短い期間……。それはなくなったわけではないのでしょうが，一言で言えば圧力団体化したというのが私のイメージで，圧力団体という色彩が非常に強くなっていった。私はその後，横浜からまた本部帰りして政審の事務局長もやりましたが，そのころは完全に言いつけに来る（笑），という始末でした。

――組合の圧力がかなり強かったということですね。

船橋　強かった，実感として。よくけんかしました。

――総評の大会の前などで，例えば人事方針について社会党は党員協議会などを開いて準備をすることがあったと聞いていますが，派閥のレベルではそういうことはやらなかったのですか。総評などの大会の前に，例えば佐々木派として組合に関連しているメンバーを集めて意思統一をするとか相談をするということはなかったんですか。

曽我　あまりやらなかったね。

――社会党大会の前はどうですか。

曽我　大会の前は組合のほうからそういう要望が……。

――いや，佐々木派として相談をするということは。

曽我　来ることはありました。それはケース・バイ・ケースで受けるのもあるし，だめというのもある。だいたい，それは選挙の候補者です。一番真剣になるのは，こいつを何とか公認しろということで，横車を押すときは大変です。

――組合の関係者を公認しろと。

曽我　こっちはもう候補者がいるんだから結構なんですと言っても（笑），これを何が何でも入れろとやってくるわけです。全逓の宝樹さんも公認を取れと何回もけんかしましたよ。

――それは誰が受けるんですか。

曽我　書記局が受けても書記局はとてもじゃない，だめだから，結局，役員のところへ行っちゃうわけです。あるいは派閥で何とかしろと。それはすごいもんですよ，そういうものは。それを認めないと他の議員を推さないと言う。推薦しないと言う（笑）。それで党は参っちゃう。そういう横車はずいぶん押してきました。

船橋　君の方は政策だから政策的なことで来るだろうけど，私のけんかはだいたいみんな選挙（笑）。こいつを何とか公認しろ，いや，だめだと。ぼくらは党費を「税金」と言っていて，税金を払ってないやつに，何で公認を出せるんだって（笑）。いや，まとめて払うから何とかしろとか，ありました。

――特に押しが強かった組合はどこですか。例えば全逓とか国労とか。

曽我　東京は全逓が強かったですな。国労も多少はあったがね。あとは都労連。東京には都労連というのがありますから。私は役員だが組合出身じゃないですから，今回の選挙は国労にと，飴をしゃぶらせる。この次は都労連，その次は公労協と順番にうまくやる。何だ，あの野郎のやり方は。うまく使い分けをしていると，最後は怒られて大変なことがありました。

だけど，一番圧力が強いのは選挙です。なぜかというと，組合の役員になっているトップを議員にしないと空かないから次が頭打ちになっちゃう。それを何とかしろというのが，やはり多いです。そのときはなりふりかまわずやってきます。

――派閥，あるいはグループが口利きをすることもあるんですか。

曽我　それはあります。

――佐々木派と特に関係の深かった組合はあるんですか。

曽我　ありますね（笑）。全逓……？　取引した。そのために浅沼さんの奥さんに怒られた。浅沼さんは亡くなられたでしょう。それでお母ちゃんがあの選挙区で１回やったんです。これは勝った。お母ちゃんは１回だから空いた。その後を奥さんとしては長く浅沼の選挙をやってくれた浅沼派から出したいわけです。

加藤清政という千代田区の都会議員，港区には岡謙四郎がいた。だけど，僕の方はそれでは困るので，新宿・四谷のほうからこれは出る気はないけど出るという格好にして，地域支部から四人ぐらい出した。だけど，いくらやっても決まらない。それじゃ，おれに任せろ。いや，白紙は困る。浅沼さんの後にふさわしいように決めると。

最後は白紙でやるということで，広沢賢一君を入れた。そしたら怒られちゃって，浅沼の母ちゃんがその後の全電通の会館で開いた中央委員会のとき，会場の前の旅館に陣取って，来る中央執行委員を片っ端から呼んで，曽我の陰謀に引っ掛かるなってやっている（笑）。もうどうにもならない（笑）。

それで中央委員会で，その場合には東京は他の区も含めて一切公認を申請しない。それでにらみ合いのまま，午後になってようやく認めたことがありました。

その背景はもっとあって，東京６区に広沢賢

一を持っていくつもりだった。そこへ全逓の宝樹が，何が何でもそこへ入れてくれという候補者を持ってきた。安田龍。見たらこれが古くて，全逓の中では人望がある。浅草郵便局の出身。だから，これを何とか候補者にしないと自分の委員長の座まで危ないわけです。だから必死です。

ぼくは，彼はその時川崎の党員で都民税を納めていないからだめだと（笑）。いや，これから一生懸命納めるし，いろいろやると言う（笑）。東京の他の地区の社会党候補者を全逓は推さないと言う。それで困った。河上さんが委員長だったので，河上さんにこういうことをしてもらっては困ると言って，書記局で選対の事務局長をやっている河上派の伊藤栄治君を呼んで，おれが一生懸命，川崎から来るやつを防いでいるんだけどどうにもならない。仕方がないから広沢賢一を１区へ持っていくが，どうかと……。

いや，１区でも浅沼のお母ちゃんが反対するから困ると言う。困ると言ってもそれ以外に方法はないじゃないかと。それで，僕は宝樹さんから引っ越し代はじめ金を取って，はんこを押した。河上さんもしょうがないということがあって，話をつけていたにもかかわらず，お母ちゃんがなお中央委員会の前の宿屋で頑張って，次から次へと役員を呼んでは，あんた，どうしてくれるのよ，とやった。

それでぼくは，もしこのままなら中央委員会で発言します。全逓が推薦しないと言い，河上委員長もうんと言っちゃったので，もうどうにもならない。それで広沢賢一を１区に回す。本部がもうしょうがないと言ってるんだから，これはもうしょうがない。それで結果的にそうなった。だから浅沼のお母ちゃんにぼくは恨まれて，お化けに出てくる（笑）。そういうことがあったんですよ。

構造改革について

――江田さんが佐々木派内部での議論を行わずに突っ走ってしまったのは大きな問題だったのではないかという話でしたが，もし構造改革論が佐々木（派）に持ち込まれた場合，佐々木さん自身は賛成だったのか，反対だったのか。書記の中でも「構革三羽烏」と言われる方がかなり突っ走ったのですが，他の書記の方，「くれない会」はその動きをどのように見ていたのか。さらに，曽我さん自身は構造改革論をどう評価されているのか。ここら辺をお話し願いたいと思います。

曽我　１つはさっき言ったように，江田さんは鈴木・佐々木派だったし，しかも佐々木派の中で相当な力を持っている人だったから，そこへ構造改革論を持ち込んだとすれば，どういう議論が展開されたかは別として，少なくとも，結果的に江田さんが党を出て行くことにはならなかったと僕は思います。

――佐々木さん自身，構造改革論について何かおっしゃったことはあったんですか。

曽我　言いましたよ。「池に浮かんだ月の影」とか何とか，最初はわかったようなわからないようなことを言ってたよ（笑）。

――考え方としては近かったというふうに理解していいですか。

曽我　最後は「社会主義的・的政権」と言っていたんだから同じなんですよ。

――「的・的」と構造改革論は比較的似ているけれど，50年代後半で構革論が議論されたとき，佐々木さんの考え方はどうなんですか。

曽我　江田が単独で踏み切ったということを含めて反対です。総評の太田薫をはじめ反対ですし協会も反対でしょう。そういうことも全部含めて途中からは反対で行ったんです。

――じゃ，江田さんがああいう形でなく，佐々木派に持ち込んでいろいろ議論をして相談

していれば孤立することはなかったということですか。

曽我　僕はそう思うけどね。そこはわからないんだよ。私はもう都本部へ行っちゃってるでしょう。東京へ行っちゃうと構造改革なんてのんきなこと，言ってられないんだよ，毎日毎日忙しくて。だから何が始まったんだって聞いたら，いや，こういうことなんだと。じゃ，おまえらも付き合ったのならちゃんと結論を出さなきゃだめじゃないかと，僕は言ったんです。

そうしたら，いや，引くことになったんだと言う。となると，江田グループだけが突っ走るのか。江田さんの方も自分たちが抜けたら果たしてどうなるかわからないと言いながら，だんだん入っちゃったという感じですね。そして，つぶせという結論になりました。

つぶすとき演説だけはおまえがやれと言う。こっちは構造改革の何たるかもわからないのに，つぶすのは下手な理屈を言うよりは大会全体にわかりやすく，なぜいまさら構造改革の議論をしなければいけないのか。こんな社会党に誰がした，と言ったほうが早い。「じゃ」というので止まっちゃったよ。大会の本会議場で構造改革の難しい話をやったって，わけわからないもの（笑）。

だから，それを一生懸命勉強した人には申し訳ないが，勉強したことをもう少しうまく広めなければだめだよね（笑）。自分たちだけのものでいい気になって，正しいと思ったって，世の中，通るわけがないんだよ（笑）。そこが純真なんだな。

――２つばかりいいですか。１つ目は確認です。佐々木更三先生が河北新報社のインタビューに答える形で，『本音で生きた八十年』が出ていますが，佐々木更三は構改論争で戦略としては断固反対という見出しです。そしてインタビューに答えて，構造改革については戦略的・根本的方針としては，おれは反対だということになって，江田君と論争を始めたんですと記事に書かれているわけです。曽我さんもそこのところについては，それでいいのかという確認ですが，それはいいですね。

曽我　最後はそうです。私も佐々木派だから，最後は，じゃ，それでやりましょうと言ったんだが，後味は悪いです。聞いてみると，うちの仲間（くれない会の幹部）も行って一生懸命勉強していたというんだから。

――途中までは重なっていたという話ですね。

曽我　最初はね。

――２つ目は，都本部方面の話で，結果的には袂を分かった江田さんからは大きな影響を終始受けておられて，特に組織機構改革のところについて東京で具体化した。１つ目は近代化して，職員をきちんと配置して，オルグ団も置こう。２つ目は区長公選の運動を頑張ってやろう。３つ目に，共産党との対抗も若干意識しながら，党の学校や教育を進めていこうという。その具体化はどの程度まで，都の書記長，委員長時代に進んだのでしょうか。

曽我　学校の施設は持てなかったけれども，定期的に党学校を開いて勉強することはずっと続けました。ただ，金がないから学校の施設とかそういうことは一切なかった。

――例えば，社会主義協会であれば労働大学というような感じで……。

曽我　私は，社会主義協会は反対だから，協会に入らない左派は私ぐらいしかいないんだよ（笑）。あとは入ってんだ，みんな。かたちだけは……。

――非協会で，しかも左派の独自のそういう教育機関は，党以外のところで動きはあったんですか。都本部以外のところで。

曽我　都本部以外のところ？　佐々木派とい

うのは，だいたいそうです。社会主義協会は社会主義に関する１つの学校である。だから，その限りにおいて，そこで大いに社会主義を研究したりするのはいい。だけど，イコールそれが社会党左派の方針になるものではない。それがわからないようなことを，あの前後はしばしば言ってくるわけです。

そんな幅がないような運営をしたら，党は右派もいるし，昔は西尾派もいるし，もう少しこちら側には平和同志会もいるから，協会の思う通り全部党が行くようなことになるはずがないんです。にもかかわらず左派の人は協会に入って，雑誌『社会主義』をみんな買っているんです。だからおまえら，そんな雑誌を読んだってちっとも党員が増えないじゃないかと，ぼくは年中そう言っていた（笑）。

それは向坂派から見ればおもしろくない。だけど，構造改革をつぶせという要所，要所の発言はみんな僕なんです。だから向坂さんは，あいつを協会へ入れろと（笑）。いや，ほんと，何回もそういうことがありましたよ。僕は協会の中で言論の自由が許されるなら，みんな仲間も入っているからいいですよ，と。あの中（協会）ではそういう生意気なことは言えませんよ。

だから，私は入らない。私が入らないものだから社青同が３つに分かれて混乱したら，私が解放派の親分だ，第四インターの親分でもあると言われるわけだよ。協会の幹部から，そういう馬鹿なことを。何で協会に入らないといけないのか。ぼくはよくわからなかった。佐々木さんだって協会員なんだよ。そうなんですよ，みんな。

――66-69年の終わりごろ，社青同は非常に混乱しました。そのとき，太田協会派と向坂協会派と「反戦派」と呼ばれる３つに分かれました。そのとき曽我さんは協会に入らなかったがゆえに，いわば反戦派の親玉的存在だと言われたと……。

曽我　見られましたね。見られましたが，決してそうではないんです（笑）。きちんとまとめるために懸命な努力をしたんです。

今のは，ちゃんと記録に残さないと。決してそうではなかったということは（笑）。そう重い気持ちはないけれど，みんな雑誌『社会主義』を取っちゃうんだよな。気軽に……（笑）。それが騒ぎになると一つの印みたいになっちゃうんでね。協会がまだ学校的役割にとどまっているときはいい。これが１つの政治集団として，党に介入してくると大変です。やがてそうなった。

結局，社研が割れていくわけ。後からの話になると，社研の他に「３月会」みたいなものをつくろうという動きが出たりするんですが，たまたま途中までは佐々木さんの考え方と協会と，つまるところ一緒だったものだからすっと行っちゃった。けれども，「道」をつくる最後まで社会主義研究会が責任を持てるかというと，ちょっと持てないと思う。しかし，そこはあまり気にせずに行っちゃった。そういうところでしょうね。

率直に申し上げますと，私自身は「プラハの春」までは社会主義革命について未練がありました。「革新の大義」は大事にしていかなければいけないと思っていたのですが，「プラハの春」で消えました。以後，私は社共からバーッと社公民派に転換します。

だから，以後は共産党にぶったたかれるわけです。美濃部をつくり，「明るい会」という社共統一戦線のお手本みたいなものをつくり，全国にそれを広めた。それが今度は，何だ，あの野郎，社公民にいつ変ったんだ，ということだな。一時は，宮顕さんの覚えは良かったんですよ，私は（笑）。ほんとに。やはり「プラハの

春」ですよ。

船橋　構造改革論が佐々木派と分かれた。これには３つ理由があると思います。１つはタイミングで，浅沼さんが殺された翌日に大会に提案したわけで，これは提出のタイミングとしては最悪です。みんなが悲憤慷慨して仇をという気分のときに構造改革という民主主義を重視して，民主主義と社会主義の継承的な発展なんてものを出した。

２つ目は総評の問題。特に清水慎三が「不幸な船出」と書いていますが，実は自分で総評の質問集を書いたので，「不幸な船出」を仕掛けたのは清水慎三だったと私は思っています。要するに，総評から反対が出たということ。

３つ目。これは江田三郎さん自身の責任だと私は思っています。曽我さんと別の言い方をしますと，あの人は頭を下げるのがきらいな人なんです。人に挨拶するのに上を向いて挨拶をする人なんです（笑）。しかも，佐々木更三さんの推挽で書記長になって，週刊誌の表紙になり，テレビに出て人気者になった。国会の廊下ですれ違っても，先輩である佐々木更三さんに頭を下げない（笑）。これがある意味，決定的だったと私は思うんです（笑）。恐らく曽我さんも否定しないと思います。

曽我　しない（笑）。

――その３つが実相だと，私は旧江田派のというか，今でも江田派ですが，その立場から自己批判と総括をしました。

曽我　労農党から来た人は，江田派に行った人と平和同志会に行った人と，あとはどうなったの？

――労農党から来たのは赤松君，黒田寿男さんなどで，文化大革命のときに赤松君は「毛沢東語録」をやったわけです。それで私のほうと論争して，それじゃ袂を分かとうと。それで親分はと言ったら，黒田さんも同じだと言うんです。それじゃ，もうついていけないというので，我々は社会党の中で構造改革論でやるということで決別しました。

曽我　議員はいろいろだよな。木村さんなどは？

――日中友好協会（正統）本部へ行った人たちはこれに賛成した人たちで，私どもはそれにはついていけないということでした。木村禧八郎さんはあの時代にどうだったか。まだ現役だったか，はっきり覚えていないのですが……。

構造改革派と言っても，我々労組から来たのはイタリアの労働プラン闘争，第３回世界労連大会のヴィットリオ報告，トリアッチの「新しい道」から，ストレートに構造的改革路線を進もうという選択を社会党へ入る前にしたんです。そして，社会党へ来てみたら同じことをやっているグループがあり，構革三羽烏のほかに，広沢賢一，高沢寅夫，笠原昭男といった人たちも最初は一緒にやっていたわけです。

曽我　最初は一緒にやっていたんです。

船橋　貴島，加藤，森永は当時共産党員だったかどうかわからないけれども，佐藤昇の影響をもろに受けていたわけです。私は佐藤昇を知らなかったんです。だから，しばらく私は構革派書記局内部で冷や飯を食わされて（笑），口をきいてもらえなかった。『月刊社会党』の編集長をやっていましたから，中津論文をどんどん掲載すると，加藤宣幸さんににらまれてクレームをつけられたりしたけれども，そのうち加藤さんなどは中津理論もいいところがあるというようになった。高沢，広沢，笠原といった人たちは総評の圧力が一番大きかったのではないか，と私は見ています。特に，笠原君は総評と社会党との連絡将校みたいで。

曽我　でも，労農党の人がここで二手に分かれるというのはね。ぼくも途中までどうして構造改革の人が黒田さんのところへ残っているの

かよくわからなかった。当時労農党の中にも半ば共産党に近いのもいたのと違う？

――この前ここでお話ししたと思いますが，労農党の中に潜りの共産党がいて……。

曽我　いたでしょう。

船橋　それを「統一派」，ぼくらは「主体性派」と言っていて，津島忠孝とか松本健一あたりの指導を受けたと目される書記局員３人ぐらいが二重党籍を持っていた。

――黒田さん自身はどうだったんですか。

――黒田さんは持っていません。共産党の党籍を持っていることがはっきりしたのは議員では堀真琴だけです。岡田春夫はかなり共産党くさいと言われたけど，それは違います。シンパではあった。

曽我　要するに，労農党の人が入ってきて，結局，構造改革をした人とあっちと２つに分かれるでしょう。それが当時の社会党もわからなかった。労農党だから，黒田さんのほうだから，この中に構造改革を言う人がいるとはね（笑）。だから，労農党の中のまともな人が構造改革へ行ったわけですね（笑）。

――黒田さんはもともと中国派ということでいいんでしょう。労農党の主席ですよね。「主席」というのは中国のまねをしたんじゃないかと。

曽我　別に，中国のまねをするという意識はないと思います。僕が最初，訪中したときは黒田さんも一緒でした。６つか７つの団が一緒に行ったんだから。構造改革は国際的には修正主義で，反構造改革だから代々木なんかよりよほど皆さんのほうが立派なものだと。それで毛沢東に褒められちゃったんだよ。そのとき黒田さんも一緒に行ったけど，ぼくは黒田さんという人は確かに日中友好で一生懸命やった人で，ぼくらの佐々木派よりももっと中国にのめり込んでいた。我々は若干距離を置いていた。

いかなる国の核実験にも反対です。中共は，最初はそうでないから。社会主義国，共産圏の核実験は平和のためだと言うので論争をやったんです。この次に話すけれども，喬冠華という外務大臣は成田さんが代表団長で行ったとき，いかなる国の核実験にも反対。これはダメ。だけど，日中友好賛成は一緒。それでお互いに酒が強くて（笑），マオタイを乾杯しながら25杯飲んだと……。

――鈴木茂三郎氏が書記長をどんどん交代させ，無名の議員を政権交代に備えて世の中にだしていくと，当時のインタビューでも鈴木氏はそうおっしゃっていますね。

構革論争について２点，質問させていただきたいと思います。１点目は，構革論は党内の状況を無視して急に出てきて，それがその後のこじれた原因になったとおっしゃったのですが，『社会新報』1961年１月１日号に「共同討議」が載って，当時の主要な派閥の書記はそこに参加しているから，社会党内の了解は取ったというふうに構革派の方々は説明をされているわけです。それに対しては，どうお考えなのか。

２点目は，1970年代には全野党共闘から社公民に移行しつつあったのに，江田さんはそれに我慢できなくなって飛び出してしまった。早すぎたのではないかというお話でした。江田さんが離党して，そのあと亡くなってしまう。向坂派，協会が追い出したのではないか，とたたかれて協会規制が行われ，社公民路線に転換していくという流れだったと思います。あのとき江田さんがずっと社会党に残っていたとしても，協会派規制が行われ，全野党共闘から社公民になったとお考えなのか。

曽我　構改派の人はそれなりに手続きを踏んでやったと言われるけれど，60年，61年というのは，まだ安保の余波が社会党の中に残っている。浅沼さんも殺されている。左右がようや

く統一綱領でまとまってきている。そこへ綱領次元的な，社会党の基本戦略を変える問題提起をした。私が思うには，下準備があまりにもなさすぎます。

船橋さんは違うかもしれないけれど，それは本部の書記がそう思い込んでしまった。僕なんかは東京にいたでしょう。東京にいる僕でさえも，今あんなことを言われたんでは困るんだ。ようやく江田さんがやった機構改革を下で受け止めて，何とか党を強めようと思っているのに，またぞろそれをやられたのでは困るという，そういうことがあったと思いますね。

確かに『社会新報』の構改を進めた書記が編集権を一時独占したからね。そのあと協会が独占したけれど，独占するとみんな悪いことをやるんだね（笑）。自分のほうをみんな入れて，他のものは省く。何でこういう議論があるのかというと，『社会新報』で流してありますよと。しかし，下のほうでは自分のものとしては受け止められないまま，ポンポンポンと行くものだから，結局，戦術で止めておけというんで，戦術論で止めちゃう。こういうことで「道」になっちゃった。そこらへんが，僕は本当に不幸な出発だと思う。

確かに，左派の連中も書記局も，最初そこに入ったのは事実ですよ。私でもそこに入れてくれたら（笑），もうちょっと違ったことを言ったかもしれない。やはり本部の書記はいい意味では理想主義で，悪い意味では楽観主義だ。下の苦労がわかっていないんだ。

あとの話は，僕は江田さんが抜けたときはそうとうショックだったですよ。構革論争が「道」で一応終わったでしょう。そのあと，もう社共ではやっていけないのに，成田さんが全野党共闘にこだわるわけ。実際は社公民なのに。やはり共産党とも社共でやる，あとは社公民でやる。合わせて１本。

そんなうまいことができるはずはないんだね。具体的には選挙のたびに，それぞれの党と別個に政策協定みたいなことをやっている。やらなければ選挙にならない。そういう現実があるんだから，江田さんも短気を起こさずに頑張っていれば。佐々木さんも的・的と言っているんだから。だいたいわかっているんですよね，お互いの気持ちは。

だけど，社会主義理論委員会をつくって，あれは鈴木さんのためにつくったのかな。鈴木さんは資本主義の分析をやりなさいと言った。それは僕にも盛んに言いましたよ。だから資本主義の分析で，その範囲内で構造改革論のエキスを幹部に言って洗脳してくれれば，別に綱領変えなくても，統一綱領の中でできるんだよ，応用動作として。資本主義がここまで発展してきて世の中が変わってきたということを，鈴木さんなりに頭にひらめいたと思うが，結果的にその資本主義分析を当時の協会の向坂理論の展開と結論のところへ持っていってしまった。これは非常に不幸な結果ですよ。

外交について

――中共も政権与党なわけだから，外交政策として社会党を使うことは当たり前のことだと思うけれど。例えば反構革派を強めてソ連から離れさせて，ということを考え，そのために便宜を図ったことがあったのか。中国から反構革派にお金が流れていたかどうか。

曽我　お金は全然。

――お金じゃなくても。

曽我　流れていれば誠に結構な話で。少なくとも私に関しては，佐々木派に関しては，お金は一切ないですね。中国へいらっしゃいと。行っていろいろなところを案内して，親切にいろいろ説明してくれたり，そういうことはありますよ。

ただ率直に言うけど，黒田派とか細迫兼光さんとか，旧労農党にもいたような人。あるいは黒田派の中には共産党ぎりぎりの人がいましたよ。共産党に対する対応と，社会党に対する対応は，途中まで明確に違いました。

――黒田グループというと平和同志会ですね。当時の平和同志会と中国で会ったりとか，一緒に行ったりとかはなかったですか。

曽我　ありますよ。うちの団が，私が窓口になってる社会党の左派活動家訪中団。この中には黒田派を入れなきゃならない。その諸君と一緒に行ったときは，特別にその諸君たちだけ呼んでやったかというと，それはないですな。ただ何回か共同声明を作ったですね。そのときに黒田派が行くと，この人たちが個別に中国側と裏で会って，いろいろやってるという話はありました。

――もう一つは社会党の中でも親ソ派，親中派みたいなことになりますね。親ソ連派というのはどういう人たちですか。

曽我　向坂派でしょう。向坂さんのほうは，理論的な問題で非常に近かったということです。ソ連派の大物というは，実はそこにいるんじゃない。別の派にいるんだよ。

――誰ですか。

曽我　レフチェンコ証言。それで社会党が揺れたでしょう，あのとき。あのレフチェンコ証言に出てくるABC，コードネームを持ってる。有名な話で表に出たから，これぐらいは言ってもいいかもしれないけれど。

「シベリアの何とか港から船1隻，油が出ます。その油を友好に一つ，使っていただきたいと思います」という話があった，当時の本部の会計から。じゃあ，その油が来たら，うちの会計に入るのかしらということになった。うちの会計に入らない。入らないにもかかわらず，総評事務局長の岩井章が社会党の本部に電話をかけてきて，「おい，油のお金，どうした」と（笑）。「あれ，半分，総評のほうにも寄こしていいはずだ。こっちはレーニン勲章だ」と，いうような話があった。油１隻差し上げるという。

――例えば友好商社みたいな形で，ソ連との貿易で便宜を図ってもらって儲けさせてもらったような話もあったわけですね。

曽我　ありました。

――中国との関係では，そんなのはなかったのですか。

曽我　一部，昔ね。

――平和同志会の諸君には？

曽我　諸君の中にはなかったとは言えませんな。佐々木派はそんな器用なやつはいないんでね。共産党に対する一定の警戒感というものを持っていました。

文化大革命について

――報告の中で文化大革命についてはあまり触れられなかったのですが，73，74年ぐらいですか。ちょうど曽我さんが中国に行かれている頃に，かなり文革が激しくなるわけですね。どんな感じだったんですか。

曽我　まず文革のいちばん激しい頃は私も行かなかったし，向こうも呼ばなかった。文革の初期と文革がもう終わる頃は，頻繁に行っています。間が抜けているんです。

最初は要するに継続革命論。劉少奇と毛沢東の違いは継続革命か，それとも修正主義か。こういう問題の提起があって，やはり継続革命論というところへかなり傾いた。ところが，実態を見ると造反有理が先行してしまって，継続革命もヘチマもない。つまり，文革イコール文化の破壊だ，文化破壊革命だ。あれはだめだ。必ず元に戻るだろうし，その間はあまり行かないほうがいいというので，活動家訪中団も文革最高潮のときは行ってません。また向こうも無理

に我々は呼ばなかった。

――日本と友好関係を取り持っている向こうの人で，文革の中で批判されたり，やり玉に挙がったりということはなかったんですか。曽我さんがお世話になってるような人の中では？

曽我　みんな下放させられましたよ。

――やはりやられた。

曽我　ええ。例えばいちばん深く付き合ってる中日友好協会の孫平化さん，あるいは謬承志さん以下，主要な幹部は全部下放させられて。日本からおみやげをもらって，それをもってるだけで全部引っ張られた。文革の試練をみんな受けてます。だから70年代はじめ，日本と正常化するときもまだ四人組はいたんですが，周恩来の命令によって下放していた日本通の人々が北京に帰ってきて，日本と正常化をやったというぐらいです。

孫平化さんは兄弟のように付き合ったが，やはり文革でやられています。いちばん最後に北京に呼び返されて，対日工作組に入った一人ですね。だから日本と付き合いの深い人は，みんなやられています。

――当時，造反有理は学生運動などでもそういうことを言うのが出てきている。社会党周辺にもあったと思いますが，内部ではどうですか。文革が社会党内外に対して及ぼした影響は，何かありましたか。

曽我　社会党でいうと山口県本部がその一つ，中心部分です。山口県には私の子分もずいぶんいたけれど，その中には文革以降，『毛沢東語録』を持ってデモまでやって。そこまでやれと僕に言うから，冗談じゃない，それはダメということになって，残念ながら社研から切り離した人も出ました。山口左派と称して，山口県にはかなり根強い文革崇拝者がいた。

理論的問題としては革命の継続性，持続性。革命をやったあと，それは大事にしなきゃいかんし，「道」が言うとおりなるべく早くその過程は通過して，次へ行け。それが当時の左派の考え方だったから，最初に提起した文革については改良主義，修正主義に行くのを防ぐためにやったんだと，純粋な意味で思っていた。そのうち造反有理になってくると，何が造反で，何が有理なのか訳がわからなくなって，結局は文化破壊，古いものは全部悪いといって周恩来が四人組の主要な目標になっちゃう。それがわかって，あとは全然ダメですな。

――中央では日中友好協会正統本部。光華寮の問題がありましたね。善隣会館事件もありましたね。

曽我　まだ労働党が残っていますね。あれは文革の過程の中で……。

――神奈川県，多いよ。

曽我　神奈川だけじゃないんだよ，一応全国に。また社会党で，安易に名前を載っけている諸君もいるんだよな。

――槙枝元文さんとか。

曽我　そうなんだ。槙枝さんが何で。

――槙枝さんも労働党の組合に関わっていたことがあるんだ。

曽我　代表委員だ。労働党ではないんだけど。

――中国派と見られる日本の組織として，日共から割れて労働党ができたわけです。しかし文革が批判され，今どうやっているかというと幅広路線になっている。昔の社会党みたいな形で非常に幅広い路線になって，右寄りかと思うような人でも呼んで，そういうふうに変わってきているんですよ。

――変わってきていて，そんなに違いないんだったら，社民党なり，新社会党なりと一緒になっちゃったらいい。

曽我　みんな警戒しあってまとまらない。それぞれの素性がはっきりしているので，やっぱ

り警戒心があるから近寄らない。ただ，僕は参考までに機関誌だけは読んでいるんですよ。

新宣言について

――党本部に戻ってから，新宣言をつくるために10年間，全精力をかたむけたとおっしゃった。それで社会党が発展すると考えられたわけですが，結果的に言うとしぼんでいった。そのへんについて，今どう考えておられますか。

曽我　私から言わせれば新宣言どおり思い切って行ってくれれば，こんな社会党にはならなかったはずだけれども。新宣言は作ったけれど，党は新宣言どおり動かない。社会主義協会は依然としてかなり党の中に力を持ってましたからね，総評など共闘組織も含めて。やはり「道」「道」って新宣言が通ってもなおやっていましたし。残念ながら，社会党の主導権で政権を取ることを自ら放棄したんじゃないですか。逆説的にいうとそういうふうにしか思えません。

土井さんの「山が動いた」というのが参議院選挙（1989年）でありましたね。あれまでは政審会長レベルで，「津軽海峡春景色」とか伊藤茂君が歌を歌って，菅君が社民連の政審会長。社公民，社民連で北海道会議を開いていいところへきていたんですよ。で，参議院選挙のときは，４党の政権協定ですね。これは８分どおりできていた。

あのとき，ちょうど社会主義インターが新しい宣言を作った。その社会主義インターの新しい宣言を伊藤君が持ってきて，いちばん面倒くさい民社に「社会主義インターがこう言ってるんだから，これは否定できないでしょ」とやって。何とか４党で，一つの政権構想をまとめるところまできていた。

ところが，参議院選挙で勝ってからいい気になっちゃった。「山が動いた」途端に社会党がセクトを出して，まず土井ドクトリンを出した。これは元へ戻って安保破棄だし，積極中立をはき違えた。それに対して，今度は公明党が怒って公明党ドクトリンだから。民社も民社で出した。衆議院選挙はバラバラ……。社会党は勝ったよ。社会党はまだ土井人気があったから，社会党は伸びたが，他の党は全部だめ。以後，公民，社民連は社会党とは，もうさようなら。

小沢のイニシアティブで細川内閣ができた。そのあとは村山内閣をつくった。うちがつくったなんてとんでもない話で，うちは乗っけられた。細川総理の時。細川は完全に一・一ライン（小沢一郎・市川雄一）。

そこのところまではいいという評価の人と，僕はもうだめという評価。社会党の中で評価は分かれるかもしれないけれど。いいことも多少はやったに違いないけれど，いちばん悪いのは選挙法を小選挙区制に変えちゃって，自分で自分の首を絞めた。こんなばかな政党はどこにもない。

そこまでいきゃあ，もう何をか言わんやで，およそ政権を取るという展望での社会党は終わった。僕は「山が動いた」ということで終わり，と言う以外にないと思う。あとは自分の主導権で全然やってない。あとの指導者は指導者じゃないよ。

――そうすると土井さんの責任ということになりますか。

曽我　結果的に，首相は取っても選挙はできないでしょ。社会党が内閣総理大臣を取って，選挙をやったことが一度もない，片山のときまで含めて言えば。村山さんのときもやらないでしょ。細川内閣の時は，おたかさん（土井たか子）を議長に祭り上げ，政権取って総理といったって，選挙をやる前から勝負をつけられたって，こんなばかな話。考えてみれば，よっぽど人がいいし，馬鹿だね，これは。残念だが，そう言わざるを得ない。

だから，80年史を作ったところまでは私も関係があるから責任を持ちます。80年史は歴史の事実の積み重ねという意味において貴重な資料。それは後世に残ってもいいと思う。

40年史を作ったが，これはだめ。これはもう左派の評価だけが載っかってる。僕は左派だから本当はそれでもいいと思うが，あまり信用できない。皆さんがこれから社会党の歴史の中で事実関係を丹念に調べる必要があるときは，80年史は大丈夫だと申し上げていいと思うが，40年史はやめたほうがいい。

――危ない，ということでしょうか。

曽我　危ない。完全に左派だ。

――「プラハの春」までは「道」路線派だったけれども，「プラハの春」を受けて社公民路線に転換したと，そういうお話があったと思います。どういうところで認識がグルリと転回していったか，というところを伺えたらと思います。

曽我　やや象徴的な意味で，私の歩んできた道の一つの大きな転換点が「プラハの春」であるということを申し上げました。私は戦前，国家社会主義者のハシくれだからね，多少。

それで社会党入党まで２年ぐらい自分で考えて，自分で入った。以後，社会党に入って左派でずっときた。何でみんな議員になったんだろうと。やはり議員でないやつが少し頑張ってないと，この党は組織がもたないと。でも，議員でないのが残ったってそんなに偉くなれない。

そうすると，これはやっぱり議員にならずに何とか党の実権を握っていかないと，本当の選挙対策はできないと。僕は浅沼さんに言ったことがある。あなたはもう有名人だから，議員辞めて専従書記長でやんなさいと。浅沼さん，何て言ったか。「君，東京の書記長をしたから，そのうち都知事候補がいなくなったら，（中央政府が取れなかったら）おれを都知事候補にしてくれ」と言ったよ。はあ，と思ったな。

浅沼さんの経歴を見れば，昔の東京市会議員をずっとやって。三宅島でしょ。東京に執着を持っていました。浅沼はだめだと言うから，僕の周辺の活動家がおまえがやったらいいじゃないかというんで，僕が東京で書記長，委員長をやって，本部に乗り込んで本部の書記長を責任をもってやってやると。そういうつもりでいたところが，共産党さんが先にみんな議員になっちゃった。

最初は美濃部の選挙のときなんか，宮顕はまだ議員じゃなかった。宮顕は僕に何と言ったか。君ね，演説は成田君に任せて，五分五分の体制でやれ。共産党もちゃんと五分五分の発言権を得ようと。おれに言わせたって票にならんぞ。盛んに宮顕が言うんだ。はあ，これが共産党かなと思った。そしたら，そのうち宮顕も議員になっちゃった。

まだ若かったんだね。そういう道を通ってきたから。あまりそういう人はいないんだよ，社会党の中に。本部の実権を握るということは議会制民主主義の中では最初から不可能だったんだね。途中までできるように思い込んでやっていたところが漫画チックだね。だけど真剣に左派の道を歩いてきたから，アメリカよりはソ連のほうがまだいいと思ってました。ソ連より中国のほうがいいと思った，総合判断して。

だから，ソ連の言うことについても，中国が反覇権とやったけれども，あれは兄弟げんかみたいな要素があると，しばらくはそう見て。わりあい冷静に判断はしてたけれども。まあ，プラハの春でソ連共産党はお仕舞い，あれは社会主義でない，というふうに判断せざるを得なかったということです。僕にとっては大きな転換点ですね。

そこで，共産党を切っても社公民でいくと，自分で切り替えて。だから左派から右派になっ

たというんでしょう。私は左派担当中執で，左派から１人，右派から１人。私が６年浪人して復帰したとき右派の枠で。曾我を呼ばないと協会退治もできないし，右派のほうがだめだと。右派の秋田出身の川俣健二郎が降りて，そのとき左派は岩垂寿喜男だよ。「いやあ，曽我さんが来たんじゃ，俺はこんなところで仕事をしていてもどうにもならん」とすぐに辞めちゃったよ（笑）。それから大塚君という専従者が左派から来てしばらくやった。曽我・大塚というコンビで。

協会さんも大塚君が相手じゃ，とてもじゃないがだめだよ。当時，宇野派の学者の総帥の大内力さん。これは大内兵衛の息子だ。兵衛さんは協会，力さんは反向坂なんだ。それで大内秀明，新田俊三，高木郁朗，佐藤経明等々が集まった。そのうち福田豊君（協会派）なんかも，向坂派を抜けて我が方へ来て，ようやく「新宣言」をつくる体制ができたんですよ。

その間は企画担当中執という，誠にけっこうなポストをもらって。これは書記長にぴったりくっついていたらいいんだ。そのときは，おとなしい多賀谷書記長だから，だいたい私の言うことを聞いたんじゃないですか。私は，その頃かくれたマスコミの寵児と言われましてね，私の悪口をいいことも悪いことも書いてくれて，雑誌にジャバジャバ載ってましたよ。『選択』に載ったり，どこかに載っかったりね。僕には３人の女がいる，なんて誠にけっこうな記事まで出て……。

それほど見事に切り替えたから，いちばん驚いたのは日本共産党。不破君が今度出した本で，彼は「70年半ばからは野党が弱くなった」と書いている。それは社会党が社公民に切り替えたからですよ，これで共産党は出番がなくなってしまった。ところが，不幸なことに２回ダブル選挙が続くんです，私が現役のとき。１回目は苦労して社公民をつくり，候補者を調整して参議院の１人区で，ともかく１人に絞ろうと社公民でやった。公明を真ん中に，左に社会，右に民社で。飛鳥田先生を少しごまかして，何とかそれに乗っけちゃってそこまでいった。そして不信任を出したら，自民の福田派は欠席，通ったんだ。

当時，共産党が「社会党は自民党の第五列だ」と毎日毎日「赤旗」に書くわけだ，共産党を切ったからね。お返しがくると思った。こっちも反撃してディミトロフの統一戦線，あれはインチキだ。今やそんな難しい議論をやらずに，大きいほうから一緒になったほうがいいと。社会党の次に大きいのは公明党，公明党の次に民主党，共産党は議席が少なかったから，ちょうどよかったんだ。大きいほうから一緒になって，共産も入れようと思うと真ん中が逃げちゃう。これではどうにもならんと。

じゃあ，不信任出しましょう。不信任出せば，共産党も同調せざるをえないだろうと。ところが，出せばダブルでくるというのはベテラン議員みんな統一した考え。僕は迷った。迷ったが，ここで不信任を出さないと選挙で非常に苦労すると。だから，というので飛鳥田さんと一緒に九州へ行って九州談話を出す。九州なら邪魔されないからって，あそこで不信任提出をやっちゃった。記者団がついてきたから大騒ぎ。

帰ってきてボスに怒られた。おまえは何をやったんだ。ダブル選挙をするためにやったんじゃないかと。ダブル来るなら，来たでやったらいいんだと。これやらねえと，おれのほうは共産党に対して明確な意思表示ができんと，いうことであえてダブルをやった。

うちはほとんど負けなかった。公と民は負けた，特に公が。これは民族移動ができないんで。以後，公明党の書記長は，いつ選挙になるかということをちゃんと知ることが第一の任務だと

いうふうになったぐらい。だから，あのときダブルを食らわなければ，社公民の形が一応できたからね。それで参議院１人区の中でいくつか取って，その実績で社公民連合政権を本気になってつくろうと思ったんだけれど。残念ながらそこで敗れた。

また，石橋委員長のときも，中曽根の「死んだふり解散」をくい，一緒に私も辞めた。そのとき1986年に新宣言が党大会で決まった。２回ダブルをくいました。以後，私はずっと浪人で，どこへもいかず社民できた。天下の浪人だから自由にものが言えるのかもしれない。

だけど，結果は非常に残念でした。社会党の変化が遅かったですね。結論から言えば，客観情勢と人心の変化に追いつかなかった。船橋君たちがもうちょっと頑張って，せっかく土井人気がでたんだから，土井のときもうちょっとリードしてもらっていればよかったんだね。

土井時代は１期しか中執をやっていない。一人でだだこねて，戸田菊雄が統一名簿で。それで私のほうは落選した。だから１期しかやっていない。企画調査局長を１期だけ。それまではずっと指名中執だから。

――ちょうど70年代は田中内閣ができて，日中国交回復をやりますね。そのあと三木があるけれども，福田，大平となります。田中，大平と福田は犬猿の仲になって，自民党の中で激しい争いがありましたね。そのとき社会党は，どういうスタンスで対応していましたか。

曽我　そういうときにも，最初は「己が党首」にみんな入れていた。首班指名になると，社会党は社会党，公明党は公明党とみんな入れて。これが馬鹿なことは，小学生でもわかること。野党は統一候補を出してやらなければ，いつまでたっても自民党だ。自民党が内輪げんかしているのに，野党の方もおのれの党首に投票しているんだから，こんなこといくらやってもだめだ。そうなって，今言ったように社公民をブリッジで，何とか持っていったんですけども……。

（完）